芸振

大分県芸術文化振興会議会報

No. 18.　48. 7

発行所・大分市府内町　県教育庁文化課内　芸術文化振興会議事務局
発行人・米田貞一　　編集人・矢野朔雄

# 大分市の芸術文化活動の現状と課題

安東玉彦

限りなく芸術を愛好するひとびとによってサークルが生まれ、クラブが育っていきます。大分市も豊かな郷土文化遺産のなかで、数多くの芸能文化団体が生まれ、創作活動を中心に研究をつづけてきております。そして、より立派なものを、見ごたえのあるものをつくりだすため、横の連絡調整を密にして研さんを積みたいと熱心なひとびとにより、大分市芸能文化協会が昭和28年８月に結成されました。爾来20年、謡曲、筑前琵琶、義太夫、民謡、長唄、箏曲、詩吟、民踊、日本舞踊の邦楽邦舞を主軸に洋舞を加えた団体として成長してきました。現在では、秋の芸能文化祭は恒例行事として全市民に親しまれ、加盟団体の合同発表会として、入場者 2千数百名という盛況で開催されております。また協会の事業として、市の行事には積極的に協賛し、さらに、芸能教室を毎年２種目10回開催し好評を博しています。その他洋楽関係では、ウイステリア・コールが、公務員、会社員、家庭の主婦など70名で組織され、年１回の発表会を開き、明野ママさんコーラス、荷揚町小ＰＴＡコーラス部、鶴崎小ママさんコーラスなども代表的なグループとして活躍しています。

芸術は、じょうずとか、へたとか、高い、低いの度合いではなく、誰もが参加できるところに価値があります。例えば、近年、短歌、俳画、書道、茶華道といった類から詩吟など、専門家的活動から趣味的な活動に至るまで巾広く、各地域の公民館等を利用して壮老年層に至るまで参加している現状が見うけられるのは大変好ましい傾向であります。

また、施設の面では従来諸種の事情であまり恵まれず、中央からのものに接する機会も少なかったのですが、第21回大分国体を前に、昭和41年10月、冷暖房鉄筋コンクリート地上３階地下１階、大ホール固定席2084席の堂々とした、大分文化会館ができあがり、総合的文化の殿堂として、深く、より高い芸術を観賞する機会に恵まれるようになって急激に高まりを見せるとともに、また、この施設をじゅうぶん活用して多くの市民が行事に参加するようになり、巾広い芸術文化の振興に寄与しています。すでに施設ができて10年目を迎えようとしている今日、年間中央関係からの催しもの76回、市内芸術関係団体が82回利用しています。また、昨年11月には鶴崎公民館が鉄筋３階建冷暖房付でできまして、東部方面の文化施設としても活用されており、直接的間接的に貢献しています。人口30万の都市として、これからもっと多くの婦人層や、壮年層の参加によって、芸術を愛好するサークル、グループ等団体の育つことを期待してやみません。

（大分市長・大分市芸能文化協会長）

# 市町村の文化活動

文芸

# 文芸活動の

## 大田村における文芸活動

奥　野　勝　子
（大田村民文化会議理事）

昭和33年の村民文化会議の発足により、久しく眠っていた大田村の地に新しい種がまかれた。その推進者となった人は、「富貴寺」や「国東半島の石造美術」などの著者である村長の酒井富蔵氏である。当時の大田村は、合併してまもない新しい村で、村民に公募した「大田村民の歌」が、歌詩、作曲ともに村民の中から生まれ、ひとびとは、驚きに目をみはった。そして村民の集るところ、その歌と踊りがひとびとの文芸意欲をそそった。やがてその意欲は、県下で第１回目の移動県庁を迎え、農業振興祭として手がけられるようになった。振興祭には、住民が得意な農産物、たとえば白菜、大根などを出品して、農業振興の一環として展示即売されるのがねらいであった。しかし、前に述べた村民会議は、大田村の文化活動の振興を図ることであった。そして、短文学を中心に、よせ書きや、狂歌、風刺画など時代を写した作品を集めることから始まった。なかでも山水を画いて60年、現在、百幅の山水画を後世に残そうと、全霊をこめている82才の宇留島撫山翁の作品は、素人の域を脱し、村民はもちろん専門家の間でも高く評価されている。村民の中には造形美術や、盆栽にすぐれた才能を持つ人が多くなったことは、こうした先人の影響が大きい。また、文芸活動も最近では旺盛になり、作品も非常に向上しており、よろこんでいるがこれでじゅうぶんではない。

私たちがもっとこれらの活動を理解し、お互いに交換し、向上していく活動をつづけなければならないことは言うまでもないが、村民文化会議の運営や、会場または、財政の問題などが山積する課題であり、今後上層部へ働きかけていかねばならぬと考えている。

文芸

# 現状と課題

## 国東町における文芸活動

市　丸　嗣　郎
（国東町門詩友会事務局長）

いなかにいて文芸を志す者が一様に持つものは、中央に対する劣等意識である。これを克服するというよりは、むしろ、なりふりかまわぬ文芸への憧憬を抑制できぬままに類を呼び、小集団を形成してガリ版刷りの同人雑誌が発行される。これが長期間継続されるかされないかは別として、かれらは自己の作品が、作品として一応印刷され、雑誌に掲載されたことだけで、小さな自己満足を味わうものである。

このことを、かつて取材に来た新聞記者のひとりは「マスターベーション」と評価した。その時まだ20才代だった私は、ひどい屈辱に抗弁の言葉を知らず、みじめな気持を家に持ち帰った記憶がある。しかし、いまは違う。いうなれば、「生活詩友会」の時代から現在まで、私たちは、満15年余りも「自慰」に甘んじていることを、むしろ誇りに思っている。

当時55才の人は、老令福祉年金をもらう年になり、小学校の中堅教職員だった人は、２年前に校長を退職して孫の世話をしているのが現状である。中小企業が切望する金の卵は、ここでも見つけることが極めて困難である。その原因は、「現代詩」の持つ難解という一般的認識と、言語を文学で綴ることより、現在もっぱら若い世代の間では、音と映像の即時性に興味を示すといった風潮によるもの、と解する以外の知識が、私にはない。

したがって「現代詩」なるものの捏造を行なって、〝何のご利益があるか〟との自嘲、他嘲に目をつむり、「これも文学」「これも芸術」と自分に言い聞かせながら、数少ない素材と、乏しいごいでたどたどしく創り続けているのである。これを惰性とし、習性とも評価できないことはないが、ただひとつの救いは、「同人活動」ということであり、その中で作品はそれぞれの個性の発露にほかならないし、模倣でない真の創造を常に志し、真実の人間探究を「現代詩」という方途で貫ぬこうとする意欲を、若さに代えて持続することを合言葉として、全同人が一致した前進を続けていると自負できることなのである。

印刷全般

有限会社　大分プリント社
大分市新川町２丁目５－４
電話　0975 (32) 3717・3803

# 市町村の文化活動

美術

# 美術活動の

## 蒲江町における美術活動

富　高　文　夫
（蒲江町教育委員会社会教育主事）

これまで数人による書、絵画グループの活動が行なわれていたが、この活動とあわせて、他部門の愛好者からも強い要望があり、町全体の活動の場が必要となってきた。

そこで、これらの活動をより発展、振興させ町民文化の向上に役立たせるためにも、まず組織化が叫ばれてきた。

とくに、この中で、故牧寿美一氏、増野大泉氏による熱心な指導協力により、町美術協会の発足をみた。

以来、町美術界の向上のため、相互に協調し、その実をあげ町民文化の発展に寄与することを目的に活動にとりくんでいる。

そして、昭和46年11月３日～５日の３日間、美術協会設立記念事業として、第１回町美展を開催、町民多数の参観があり大好評であった。これを機会に、各部門の活動も段々と活発になってきた。

続いて、47年度も11月に第２回町美展を開催、多くの出品でこれまでの町役場ホールから場所の広い中学校体育館に会場を移した。

ちなみに、このときの内容を記すと、全出品数78点（写真31、絵画18、彫刻６、書23）で、みんな大作であった。

このようにして、各部門の責任者を中心に、自主的活動ができるようになった。

このことは、今回の蒲江地区公民館落成記念行事の町美展に如実に現われているといえよう。約90点に及ぶ出品と、１,000人近い参観者をみた。少しずつ前進しているのである。

しかし、まだまだ多くの問題をかかえている。県展をはじめ、各種の展覧会の入賞や特賞を受けているが、会員が少なく底辺の拡がりが少ない。町美協へ町民多数の参加が望まれる。

また、技術向上のために研修会を開き、中央より講師の招へいをしたいが予算が少なく思うように活動ができない。

それから、町美展のすすめ方として、町民文化の向上のため純粋美術だけでなく、生花や盆栽、手芸等の総合展覧会を開く必要もあろう。

これからは、年一回の町美展と年一回の総合展覧会を開きたいと思っている。

あくまでも、親しみのある町美展にしたいものである。

## 武蔵町における美術活動

森　本　　茂
（武蔵町文化協会事務局長）

昭和38年10月頃だったと思う。当時「町内にある各種文化団体をひとつにまとめたらどうだろうか」という話しがもちあがった。近いうちに各団体の代表者に集ってもらい、相談をしてみようと思うのだが、ということで、設立発起人会が開かれ、約１ケ月ほどして設立総会が町役場の会議室で約 100名の会員が出席。会長に片山真一氏を選び、正式に「武蔵町文化協会」として発足したのが、昭和39年12月であった。

滝口武士氏の湲句会が戦後まもなく、桜井種雄氏の短歌詠草会が33年３月と、各部会の活動も当時から活発であったが、いずれの部会でも共通の悩みは会場と、各部会の横の連携がとれないということであった。このことからしてもじゅうぶん協会設立の要素はあり、機運が熟していた。

美術

# 現状と課題

そして、昭和40年11月統合中学校の落成式に、文化協会総合発表会を開き、好評を博した。

翌年より、年一回開催することに決定し、昭和45年より県芸術祭の参加行事として、芸術文化祭を開催する運びとなった。

この年、本町にも県下に誇る中央公民館が完成し、学習、創作の場として、その果す役割も大きく、会員120名の今後の活動に期待している。

なかでも、美術部門の活動は活発で、絵画部では、年４回別府緑ケ丘高校の脇坂先生を招聘して指導を受けながら、毎月第三日曜日には中央公民館講座室で、またキャンバスを抱えて、遠く大分・別府と県内に足をのばし、秋の芸術文化祭に備えている。会員も65才の婦人から青年まで巾広く、中央公民館、地区館、学校など、人々の多く集るところには、必ず会員の力作がみられるのは心強いかぎりである。今後も、理解ある方々の入会を希望すると同時に、県美術展などが開催できるような設備が完成するよう、はたらきかけていきたい。

一歩一歩着実に、そして、そのともした火は小さいけれど、芸術文化を通して、情操豊かな人間形成に微力を注いでいきたいと思う。

## 中津市における美術活動

武　田　由　乎
（県美協中津支部常任委員）

中津に美術協会が生れてからもう21年になり、この17日から童心会館に於いて21回展を開く予定になっている。現在会員数約40数名。この外に櫟映舎というグループもある。これは、南北両高校で武田の指導を受けた者達の研究と、親睦を兼ねた集りで、毎年秋に展覧会を開く。また二日会というグループがあり、吉松眞司を講師として毎月二の日にクロッキーの練習をする。そして年１回作品の発表会を行なっている。

会員で中央への出品者は、長野静司（国画会）、吉松眞司（日本水彩画会）、武田由乎（白日会）、南光雄（新興美術院）、弘永きぬえ（日本画院）が委員、または会員として活躍しており、今度松本小十郎が白日会の会員に推挙された。なお白日会には準会員に花崎宏志、会友に松田のぼるがおり、外園雅美が本年初入選、日本水彩展へも入選した。また松田は、昨夏の渡欧スケッチでこの頃個展を開いて人気を博し、引続き今夏も再度の渡欧を計画し、はりきっている。

中津は、地理的に北九州市と近隣の関係にあり、個展其の他作品発表の場をこの方面に求めることが多い。本年になって吉松眞司、長野静司は小倉で、井上佐之助は博多で、各個展を開いている。

写真部の方は、全日本写真連盟中津支部の会員約40名は、浦野進指導のもとに毎月研修会を開き、作品の批評鑑賞を行ない、優秀作品に授賞するなど向上鞭撻に勉めている。

中津に於けるわれわれ一番の悩みは、展覧会場のないことである。童心会館は、位置も会場もよいが、少し狭くて個展以外は無理であり、公会堂は、まあまあの広さだけれど、採光が悪く、かつ壁面の設備が全くない。それで、市美展及び県の巡回展の時など材木を組立てて壁面を造るので、これがなかなかの重労働でたいへんなんだが、こうして20年余を続けてきた。せめて壁面だけでも作ってほしいと、幾度か市へも交渉して見たが、とりあげられずやむなく会員が作品を売ってパネルを作った。これで、壁面はできたが、会場の採光は依然として悪い。中津にも他の地区にあるような文化会館か、または、これに準ずるような建物がほしい。この気持は規模の大小こそ異なれ、県内の美術家各人が「県立美術館」の建設を切望しているその気持と何ら変りはない。


**現代洋画有名作家常時展示**

常設並びに貸及び企画

**府内画廊**

大分市府内町３丁目
TEL 0975—35—1757

美術愛好家のみなさまに気軽にご利用いただけるよう開放しております

# 第一回市町村単位ならびに地域における文化団体事務局長研修会

菅　久（県芸振事務局次長）

7月3日芸振会議主催によるはじめての標記会議をもったが、予定した県下各市町村単位の文化団体24のうち、18の事務局長が出席、辻副会長の司会で午前はそれぞれ「活動の現状と問題点」を報告、午後・質疑応答、つづいて米田会長、宮瀬理事（合同新聞文化部長）の助言を得て「望ましい運営のあり方について」を協議した。

終日熱心な意見がかわされ、予想以上に有意義な研修会であった。以下記録を要約して報告にかえる。

## 1　情報交換

- 犬飼町民文化会議（渡辺泰三）S.38.5.14発足、補助金2万。青年演劇、年1回の文化祭。県芸術祭参加は初回から。
- 宇佐市文化協会(末永要) S.47.9.12 発足、参加団体80、1,200名。総合文化祭、県民オペラ巡回。課題・民主的運営、市補助、会館建設。補助金10万。
- 佐伯文化振興会（生田博保）S46.11 発足、年1回の市文化祭。予算20万。年間数多くの文化行事実施。
- 津久見市文化協会(左脇日出登)年1回総合文化祭、予算10万。課題・文化協会の事務。
- 中津市文化協会(田中寅男)北九州の影響を強く受けている。小グループがそれぞれ活動をつづけているが、協会1本の組織化はむずかしい。補助金4万。課題・財政と文化会館建設。（昭和51年建設予定）
- 挾間町文化協会（後藤マコト）年1回の合同文化祭。協会業務は自主的に運営。
- 日田市文化連絡会（久恒隆弘）30団体で連絡会をつくる。補助金ヒモつき20万、連絡会だけが使用できるもの2万。芸能祭開催、市民会館建設請願。
- 別府市芸能文化協会(藤田有徳)参加十数団体、春秋2回の公演、補助金なし。
- 豊後高田市文化協会（安部孝義）S30. 発足、会員 300人、17団体、会長会費2万、一般会費300円、補助金7万。事業収入なし、日常活動を活発に週1回～2回集会。
- 武蔵町文化協会（坂本治）S38.発足、19団体、1月に発表会、補助金2万。課題・会員の意義づけ。
- 山香町文化連盟(岩間寛道)S39.11.3発足、理事長が町長、会員 700人、補助金20万、会報3,500印刷、全世帯に配布。
- 大分市芸能文化協会（村井昌）S38.8発足、邦楽、邦舞、洋舞の10団体。年1回発表会、発足当時2万円の補助があったが、現在では事業収入70万で補助金なし。年間芸能教室を開講。
- 別府市美術協会（梶原昭二）毎年10月開催（日、洋、彫、書、写）補助金18万、本年は別に別府市秀作展を企画。
- 臼杵市文化連盟（細部茂彦）12団体、400名の会員、補助金5万。
- 三重町文化連盟（久保田邦広）課題・財政の裏づけがほしい、関心を高めたい。
- 大分県文化団体連絡協議会（原田辰好）ニュースの発行、平和作品展、文化財学習会、総合文化祭、補助金は県から15万。
- 玖珠町芸術文化会議（相良篤司）S47発足、21団体加入、課題・性格づけを明確に、中央公民館のじゅうぶんな活用。補助金5万。童話祭、文化発表会、県美巡回展。

活発な議論の展開

## 2　質疑応答ならびに協議

質疑については大分市へ、70万円の益金内容は何か？その他〝会館利用の問題とプロ〟などが出されたが、質疑応答が協議問題に入っているとみて、議題をつぎの三本の柱にしぼる。

(I)　行政からの補助と財源確保の問題

(II)　市町村芸術文化団体の統合組織とその自主的活動はどうあるべきか

(III)　芸術文化の底辺を広げていくためにはどうあるべきか

その中で(I)については４つの意見に大別できた。

①　あくまでも行政に働きかけて補助金を出させる。

②　大分市や高田市の様に補助金でなく自主財源をつくってやる。

③　作品活動を真剣にやればそれでよい。

④　事業の実績をあげ認識してもらえば自然に補助金がついてくる。

(II)については、(I)の様に活発な意見が出されなかったが、結局地域によって文化団体の考えがちがっているので実状に応じてやらなければいけないということだ。

(III)は講習会、講演会、研究会を開く。しかし施設、設備がなければやれないので結論としては、施設の充実を、ということになった。

こうした協議の中で、基本問題にふれる助言者の発言があったので一部を紹介してまとめとしたい。

## 3　ま　と　め

米田――芸術文化活動というものは、まず自分でやることが根本問題、他人の補助をもらわない。しかし、なぜわれわれがこんな会を持つかということは、全体を高めたいという立場にあるからだ。だから内部に向っては研修、外部に向っては結集の力で要求しなければならない。

宮瀬――補助金を考える時「やってやるのだ」という意識が働いている。文化団体というものは自分たちだけでやるのがスジ、しかしそれだけではできないのが現状。戦前はパトロンというのがいて、いろいろと援助してきたが、それにかわって戦後は自治体から補助をあおぐ。理由は底辺拡大、文化団体が考える底辺拡大と行政側が考えるそれはちがうのではないか、自治体はただ金を出すだけではダメだ、施設づくりに力を入れてこそ意義がある。また文化団体も活動の意義をじゅうぶん考えるべきだろう。

米田――文化行政とは環境整備だ。文化団体連合体の働きは行政と現場の中間位置、地方で一番大事なことは、やろうとする熱意をつくることだ。これはなんといっても施設だろう。

芸術文化団体は方向として県や市町村と離れることが望ましいが、今の段階では県や市町村から真意を理解してもらい、この運動を振興しなければならないと思う。

## 波紋

# 県下俳壇の現状

金田　眸花（臼杵鷹俳句会）

現在全国で発行されている俳句雑誌は、約 300種と云われ、俳句実作者は、無所属の新聞投稿者を含めて、30万から50万が実数ではないかと推定される。俳句が短かい詩型にも拘らず、これ程、主義主張を異にする俳誌が乱立するのは、一見不思議な現象であり、その理由もいろいろあるが、詩型が短かければ短い程、その方法論が尖鋭化して分裂をきたすのも無理からぬ事である。

本県に於ける俳句活動の最も盛んなのは、有季定型を主張する、ホトトギス系の作家集団で、県芸術祭参加の俳句大会を毎年盛大に開いている。しかし、県内にこれ以外の俳人がいないわけではなく、馬酔木・海程・石・鷹・沖その他、全国的な一流誌に所属する作家も多く、それぞれ真剣に研鑽を続けているのであるが、横の連絡を密にする事にはひどく消極的で、他県に見るような諸誌総合的な協会を結成しようとする動きはここ数年全然見ることができない。これを善意に解釈すると、詩の世界に、多少なりとも政治性の介入する事を、いさぎよしとしない潔癖性とも受け取れるが、その半面、若干排他性もなくはない。その是非はともかくとして、おもしろい傾向である。

× ×　　× ×

先般、石主宰・田原千暉が〝炎天に雪ふるごとく〟を、東京・鳩の森書房より発行され、過日その出版記念会が県内外の著名士の参集のもとに開かれた。

内容は、愛嬢を小児癌で失なわれた同氏の動哭の書とも云うべきもので、ガンとの格闘の中に見出した、親子愛・兄弟愛・隣人愛や、ガンに対する憎しみなどが克明に綴られており、そのレポートが、ついに文学にまで昇華されたものである。その拂われた犠牲があまりにもいたましいもので、なぐさめようもないが、それだけに、この愛児鎮魂の書が、ぜひ多くの人々に読まれてほしい。本年度文芸のノン・フィクション部門での非常にすぐれた収穫である。

その他、久保青山・山上三千子・尾渡あやちの諸氏の句集が出版された。敬意と祝意を表する次第である。

## 《消　息》

△　県芸振本年度加盟団体・個人名

| 団体名 | 代表者名 | 事務局長名 | 事務局所在地 |
|---|---|---|---|
| 祐窓流吟道会 | 一ノ宮啓祐 | 古賀　久国 | 日田市三本松1－5（日田牛乳センター内） |
| ウイステリアコール | 飯倉　貞子 | 園田征一郎 | 大分市城崎町[redacted] |
| 大分市芸能文化協会 | 安東　玉彦 | 有定　稔雄 | 大分市今津留市教委社会教育課 |
| 大分県合唱連盟 | 田坂　保 | 挟間　文男 | 大分市南春日町10－1（大分女子高校内） |
| 大分大学軽音楽部スイングブラザーズ | 氏川　良介 | | 大分市旦の原（大分大学内） |
| 現代短歌研究会 | 大友　芳雄 | | 大分市金池南[redacted] |
| 三重町芸能文化団体連絡会 | 久保田邦広 | 伏野　宗孝 | 大野郡三重町三重町公民館 |
| 日本民踊研究会九州支部 | 永井　豊恵 | 菊池豊喜久 | 別府市北浜[redacted] |

個　人　　児玉　照明　大分市上白木[redacted]
　　藤永　義高　中津市三保区[redacted]
　　藤原　嘉久　大分市大道町[redacted]

△　九沖グラフィックデザイン展開催さる

- 期　間　8月6日～13日（10時～18時）
- 場　所　大分市大分文化会館3Fホール
- 入場料は無料

## あとがき

本号は、市町村段階での文芸・美術活動をとりあげた。

なお、初の市町村単位ならびに地域における芸術文化団体事務局長研修会の研修概要についても付した。

また、本年度から新しく県芸振に加盟した団体・個人名を、消息欄で恐縮ですがご紹介いたします。

次号は、第9回大分県芸術祭参加行事と、音楽・舞踊活動を取材し、8月下旬発行します。　（T）

## 一口提言（その2）

### 本県の芸術文化活動について私はこう思う

昭和47年から大分県の文芸作品集として「大分の文芸」が刊行され、今年の2月には第2集が発行されましたが、このようなことは大へん意義のあることだと思います。

第3集では、一段と内容が充実されてくることと思いますが、これからの大分県の文化向上のためにも、県下の文学活動のうえにも大きく役立っていくことと思っています。

上田　耕司（大分市）

「芸術」や「文化」ということばを私どもは軽々しく使用しているが、公害王国とまでもいわれている現在、GNP一点ばりの住みにくい現代、かけがえのない地球を少しでも住みよくし、明るく・美しく・楽しいものにするためには、みんなの力を結集して、身近かなところから「美」の感動をほりおこし、人間性の豊かな生活を創造することが必須条件であると信じ、住民運動を展開していきたいものである。

尾立　卓道（豊後高田市）

44年5月7日急逝した主人長門英と共に短歌を愛し短歌会の人々尚短文学の方に愛されてきた。亡き後も声をかけられ、よろこんでいる。大分県文化年鑑により芸術文化活動の巾の広さを知った。ことに芸術祭行事が行なわれて以来、県民吹奏楽、県舞踊大会、県美展、県演劇祭、県俳句大会などがある。短歌会は、宇佐神宮短歌会をはじめ、5月の終りの週の日曜日に県短歌大会、8月の県短文学大会、11月芸術祭行事の短歌を語る会があるが他の分野の催しを会員に知らせてもらいたい。

長門はる子（佐伯市）

## 一口提言 本県の芸術文化活動について 私はこう思う

本県の芸術文化活動は、文芸にしろ、美術にしろ、音楽にしろ、舞踊にしろ、演劇にしろ、それぞれが地道に推進されており、各部門、各地域においてその足跡は顕著である。過去は過去それなりに業績を遺しているので、今後は、県文化課、県芸術文化振興会議、各部門、各結社、各地域が、相互の存在と活動を理解しあい、批判、否定のみに終ることなく明日を耕してゆくことが大切であろう。　小原由岐雄(別府市)

大分に来てまだ2年にしかならぬ者の意見は、あるいは盲が象を撫でる態の提言になろうかと思われる。この2年間の県の文芸活動の報告を見て、各分野ごとかなりの活動が行なわれていることがわかる。しかし私どもが含まれる俳句の分野について見ると、大分県が非常に広い伝統俳句の基盤をもちながら、その活動は地域ごと、結社ごとに限定されているやに見うけられる。芸術祭における大会に加えて地域間、結社間の交流をもっと高められないものだろうか。可能なことだと思うのではあるが。　川村　稔(大分市)

もっと若い人達が自分の力で次の時代の芸術音楽を生むのだと自覚してほしい。きっかけとして娯楽の面から入っても、どんどん深く突込んでもらいたい。

地方文化活動はその県のオーケストラに代表されると言われる。自ら体験する事が本当の文化活動となるのだと思う。地方は地方の特色を生かしながら、各分野も中央との格差をちぢめるように努力すべきであり、努力したいと思う。　菊池　幸国(大分市)

公民館が各地域に必要なことは常識になった。次は劇場、博物館、美術館が、中心都市はもちろんのこと農漁村地域にも必要なことを常識としたい。古い倉を保存し民具を展示した博物館。倉庫を改造したホールを住民の文化活動の場にする等心がけていきたい。

ヨーロッパには、無人になった教会、城館、倉庫等を利用した、小さな劇場、博物館、美術館が、どんな町にも村にもあった。　菅　淳一(佐伯市)

私は去る4月20日大阪府池田市の逸翁美術館に行った。ちょうど蕪村展が開かれていて一驚した。文化活動は市町村単位の自治体がもっと取組むべきだと思う。教育庁はオルグを出して首長や教育長を洗脳する要があるように思う。「各市町村に美術館か博物館を」本耶馬渓町のごときは、いまの風物館を少しの金で博物館に出来る条件をもっている。「首長を文化首長に」。　清源　敏孝(三光村)

最近「日本再発見」の波に乗って、日本的芸術文化が陽の目を仰ぐようになったが、この現象が一時的なものであってほしくない。

しかし日本的芸術社会の在り方は西洋的芸術社会のそれに比べ、あまりにも封建的で排他的でさえある。狭いオリを破って飛躍しようとする意思が、常になんらかの障害によってまた逆戻りしてしまうことは悲しいことである。　花柳三鶴千代(大分市)

文明社会が花咲くたびに豊かな人間性と文化は病葉となって散らされていく。少数者の意識の問題ではない。中央に文化庁、県に文化課（遅きに失したが）私達は市町村教委に社会教育の中核となる文化係を置くべきだと考える。文明の病弊を憂える地域団体の良心を結集する民主的な発展の場が市町村教委の存在理由であると思う。私達は病葉ではない。人間が花咲く社会を守り育てねばならないのである。市町村教委関係者の社会的良心に訴えたいのである。情緒欠損症は恐怖の社会を招く。短兵急を要する県民の課題と思う。　渡辺　泰三(犬飼町)

旧大分空港跡地に出来るという緑のある総合体育センターは、早くも実現に向って動き出している様子であるが、われわれの美術博物館は、その後場所も規模も進展のきざしがない。文化の森というか各種の文化施設を点で見ることより集合で考えるブレーンの弱さを痛感する。要するに文化とは我々だけのものでなく、広く過去から将来に引き継ぐ施設であることを忘れてはならない。　大崎　聰明(大分市)

# 文化振興会議総会終る ―

なお、規約の一部改正があり会費1口 1,500円となり、個人は1口、団体は2口以上となりましたので併せてお知らせします。

### 支　出

| 科　目 | 予算額 | 補正額 | 予算現計 | 決算額 | 差引過不足額 | 備　考 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 賃　金 | 30,000 | 0 | 30,000 | 30,000 | 0 | 編集者賃金<br>1,000円×延30回＝30,000 |
| 報償費 | 50,000 | 1,350 | 51,350 | 51,350 | 0 | 年鑑、会報編集者謝金<br>5,000円×延10人＝50,000円<br>俳句大会費　1,350円 |
| 旅　費 | 80,000 | △ 6,260 | 73,740 | 61,860 | 11,880 | 九州文化振興会議<br>5,000円×10人＝50,000円<br>県内旅費　11,860円 |
| 需要費 | 413,000 | △30,000 | 383,000 | 318,070 | 64,930 | |
| ・印刷消耗費 | 365,000 | 0 | 365,000 | 300,960 | 64,040 | 芸振　40円×500部×5回＝100,000円<br>〃　40円×250部×1回＝10,000円<br>年鑑　390円×500部＝195,000円<br>支払済　158,500円<br>未払分　36,500円<br>事務文具代、賞状印刷 32,460円 |
| ・食糧費 | 48,000 | △30,000 | 18,000 | 17,110 | 890 | 理事会、総会、監査<br>年鑑編集打合会 |
| 役務費 | 40,000 | 34,910 | 74,910 | 74,910 | 0 | |
| ・通信運搬費 | 40,000 | 34,910 | 74,910 | 74,910 | 0 | 切手　72,000円<br>ハガキ　2,910円 |
| 使用料及賃借料 | 10,000 | 0 | 10,000 | 9,460 | 540 | 理事会<br>総　会　会場費 |
| 予備費 | 10,290 | 0 | 10,290 | 2,295 | 7,995 | 会費払込手数料 |
| 合　計 | 633,290 | 0 | 633,290 | 547,945 | 85,345 | |

収入（544,546＋63,600）－支出（547,945＋36,500）＝23,701（繰越金）

# 芸振事業計画及び予算

**事業計画**

| 事業名 | 期日 | 場所 | 備考 |
|---|---|---|---|
| 1 九州地区文化振興会議 | 9月28日<br>9月29日 | 別府市 | 文化庁・大分県主催の会議に県芸術文化振興会議からも出席、地方文化の具体的諸問題について協議する。 |
| 2 機関紙の発行 | 隔月発行 | 17号<br>18号<br>19号<br>20号<br>21号<br>22号 | 「芸振」(県芸術文化振興会議、機関紙B5判8P)を隔月に発行。個人をはじめ市町村、県立学校、図書館、報道関係等に配布する。 |
| 3 「大分県文化年鑑」の刊行 | 年間 | | 「大分県文化年鑑」(A5判約150P)を刊行、各部門別に活動状況、県芸術祭行事等県下の芸術文化活動のあゆみを集録し、あわせて文化団体名簿、市民会館文化会館の使用規定を付し刊行する。 |
| 4 第9回大分県芸術祭 | 10月1日<br>〜<br>11月30日 | 県内一円 | 大分県芸術祭を共催し、文化団体に芸術祭への参加をすすめるとともに、芸術祭集中行事等の主催行事を実施し、県民文化の振興をはかる。 |
| 5 (新規) 市町村・芸術文化団体事務局長研修会 | 7月3日 | 大分市 | 実質的に団体の運営に当っている者が、情報交換や問題点を出し合うことにより、組織の在り方と今後の運営等について研究協議をする。 |
| 6 (新規) 文化講演会 | 12月上旬 | 大分市 | 総会・県芸術祭授賞式とあわせ各ジャンルに共通なテーマで講演会を催し、会員の文化水準の向上をはかる。 |
| 7 会議<br>(1) 事務局会議<br><br>(2) 理事会<br><br>(3) 総会 | <br>4月19日<br>9月中旬<br>5月18日<br>11月下旬<br>5月18日<br>12月上旬 | <br>県教育庁<br>〃<br>県婦人会館<br>大分市<br>県婦人会館<br>大分市 | 主な議題<br>1 第9回大分県芸術祭について<br>2 県芸振の振興等について |
| 8 協賛事業<br>第5回九州沖縄芸術祭<br>○グラフィックデザイン展<br>○九州の笑い<br>○直純公演<br>○デュークエイセス<br>○文学賞公募 | <br><br>8月6日〜13日<br>8月30日<br>9月28日<br>9月20日<br>5月1日〜8月30日 | <br><br>大分市<br>玖珠町中央公民館<br>日田市民会館<br>津久見市民会館<br>県内全域 | 第5回九州沖縄芸術祭を後援することにより県内における芸術文化活動の振興を図る。 |

## 予　算

# 昭和四十八年度

— 収　入 —

| 科　目 | 予算額 | 前年度予算額 | 比較増減 | 積　算　基　礎 |
|---|---|---|---|---|
| 補助金収入 | 500,000 | 200,000 | 300,000 | |
| ・県費補助金 | 500,000 | 200,000 | 300,000 | |
| 会費収入 | 300,000 | 171,000 | 129,000 | |
| ・団体会費 | 180,000 | 92,000 | 88,000 | 1,500円× 120口＝ 180,000円 |
| ・個人会費 | 120,000 | 79,000 | 41,000 | 1,500円×80口＝ 120,000円 |
| 事業収入 | 104,000 | 99,000 | 5,000 | |
| ・年鑑収入 | 80,000 | 75,000 | 5,000 | 400円× 200部＝80,000円 |
| ・会報収入 | 24,000 | 24,000 | 0 | 40円× 100部×6回＝24,000円 |
| 雑収入 | 103,000 | 102,500 | 500 | |
| ・広告料 | 100,000 | 100,000 | 0 | 年鑑10,000円×4口＝40,000円<br>会報 5,000円×2口×6回＝60,000円 |
| ・預金利子 | 3,000 | 2,500 | 500 | |
| 繰越金 | 23,701 | 60,790 | △37,089 | |
| 合計 | 1,030,701 | 633,290 | 397,411 | |

— 支　出 —

| 科　目 | 予算額 | 前年度予算額 | 比較増減 | 積　算　基　礎 |
|---|---|---|---|---|
| 賃金 | 162,000 | 30,000 | 132,000 | ㊊事務局員賃金22,000円×6月＝ 132,000円<br>文化年鑑編集者賃金 1,000円×延30人＝30,000円 |
| 報償費 | 120,000 | 50,000 | 70,000 | ㊊文化講演会講師謝金50,000円<br>芸振編集謝金 5,000円×6回＝30,000円<br>文化年鑑 〃 5,000円×8人＝40,000円 |
| 旅費 | 160,000 | 80,000 | 80,000 | ㊊九州文化振興会議 5,000円×20人＝ 100,000円<br>㊊講師旅費30,000円　県内指導旅費30,000円 |
| 需要費 | 511,000 | 413,000 | 98,000 | |
| ・印刷消耗費 | 471,000 | 365,000 | 106,000 | 芸振会報印刷 60円× 600部×6回＝ 216,000円<br>文化年鑑 〃 450円× 450部＝ 225,000円<br>申込書、事務用品 30,000円 |
| ・食糧費 | 40,000 | 48,000 | △ 8,000 | 理事会 20,000円<br>総会 10,000円<br>事務局会議 10,000円 |
| 役務費 | 50,000 | 40,000 | 10,000 | |
| ・通信運搬費 | 50,000 | 40,000 | 10,000 | 切手 40,000円<br>ハガキ 10,000円 |
| 使用料及賃借料 | 10,000 | 10,000 | 0 | 理事会、総会、　会場費 |
| 予備費 | 17,701 | 10,290 | 7,411 | |
| 合計 | 1,030,701 | 633,290 | 397,411 | |

波紋

## マンドリン音楽を通じての芸術文化活動の抱負

福田五彦（大分市）
フクダシンフォニック
マンドリンオーケストラ

わが国のマンドリン音楽の隆盛は背てのイタリーを凌ぐ情勢であると言われており、わが大分県下にもマンドリンを愛し親しまれる人の数は実に相当なもので、殊に若人たちのマンドリンへの愛好心は、この楽器のもつ親しみやすさとそのせん細可憐な音色に心をひかれるものによるものと思います。ひとりで楽しむ人、家族あるいは職場で、あるいは研究団体によって県下のマンドリン音楽は実に盛んになってきたのであります。

マンドリンという楽器は、実に親しみやすい楽器でありますだけに、安易な考えにおちいりやすくありますが、マンドリンのもつ音楽は特異な音楽境地をもっていますだけに、マンドリンという楽器を通じて文化向上に姿勢を正してつくしたいと言うのが私の念願であり、私の抱負であります。

県下マンドリン音楽団体は、それぞれ定期的に演奏会を開催されて研究と練習の成果を発表され、独自の立場で文化向上の一端を担負っておられますが、個人、団体を問わずお互いに語り合い、また研究し合う共通の場あるいは機関をもち、お互いに活動が増強されるならば、マンドリン音楽を通じ県下の文化向上に大きな役割をもつものと私は固く信じている次第であります。

県下の文化団体の連繋的な活動の力は実に大きく、マンドリン音楽も共通の場をもってよい時期が到来していると思うのは、私一人でないことを最近知り、非常に心強く思っているのであります。

## 〈消　息〉

△ **第９回大分県芸術祭行事決まる**

・期　　間

昭和48年10月１日 ～ 11月30日までの２カ月間

・行　　事

(1) 開幕行事

10／１創作オペラ「吉四六昇天」大分文化会館

(2) 閉幕行事

11／27日本舞踊「春夏秋冬」大分文化会館

(3) 共催行事

10／２「音楽の夕べ」大分文化会館

10／６「短歌大会」朝日生命ビル

10／７「俳句大会」　〃

10／14「バレエ公演」大分文化会館

11／18「川柳大会」県婦人会館

11／21～25「県美展」大分文化会館

（未定）「演劇祭」（未定）

(4) 参加行事

申込み期日　７月25日必着（県文化課）

(5)特別参加行事

10／５～14沖ノ島遺宝展大分文化会館(予定)

△ **文化庁・県・関係市共催事業決まる**

・青少年芸術劇場

７／25「オーケストラ」（読売）佐伯文化会館

移動芸術祭巡回公演

10／21「オーケストラ」（東京）　〃

11／20「歌舞伎」（松竹）津久見市民会館

・九州地区文化振興会議本県で開催

９／28～29　別府市（豊泉荘）

△ **第14回大分県短文学大会**

８／５　別府市（豊泉荘）

△ **芸振役員補充**

○　監事　挾間　正年氏

○　理事　宮瀬香多士氏

○　〃　大崎　聡明氏

○　〃　首藤　春草氏

○　〃　楠本　達男氏

## あとがき

青葉の頃となりました。

総会も終り、いよいよ本年度のスタートが切られました。

会員各位の相互提携と協力により、県下における芸術文化活動は日ましに活発になり、よろこびにたえません。

本年度は、各市町村の活動状況を重点に取材したいと考えておりますので、みなさま方のいっそうのご協力をおねがいします。

本号が若干遅れましたことをおわびいたします。

なお、次号は８月の予定です。　（T）